

碧巖錄物語獨語【三四】

つまり「桶の底が抜け落ちる」  
「脱落」という意味です。

佛祖方のお德や修行を讃え、簡潔に宗意を示されたものを「頌古」と云います。

道元禅師がお亡くなりになつて間もなく、門弟の詮慧禅師、懷奘禪師、義演禪師等が道元禅師の法堂（説法の場）における御法語、語録、詩偈等を輯録された「永平広録」に「永平頌古」があります。そ瑞應寺の法戦式では、橋本老師が「永平頌古」の中から主題を選定されたものを用いています。そ

引用されています。この歌の謂は諸説あるのですが、「桶底を脱する」に因み、鎌倉時代の武将・安達泰盛の娘、千代能（一二三三～二九八年）のお話としてご紹介させていただきます。この逸話が伝わる「底脱の井」が、鎌倉市の海蔵寺（臨濟宗）に現存し、歌も掲示され「鎌倉十井」の一つに数えられています。

であつた父親も亡くなり無常觀は  
更に強くなりました。  
ついに出家を決意した千代能は  
いくつかの寺院を訪ねますが、安  
達一族の娘という事もあつてか、  
全ての寺院で入門を断られます。  
そして中国から渡來した蘭渓道隆(らんけいどうりゅう)  
禪師(一二二三~一二七八年)を訪ねま  
す。一度は入門を断られますが、  
その發心は並大抵な事では擇るぎ  
ませんでした。とうとうその熱意

千代能六十歳のある夜  
のようすに井戸から桶で水を汲み、  
寺に持ち帰つてゐる。ふと桶の中の月が目に留まります。この水汲みは三十年以上も毎日続けていたのですが、この日の月はとても清らかで、丸いお月様が桶の水にゆらゆらと輝いていました。静かにその月を見ていたところ、突然長年使つていた桶の籠たがが外れて底が抜け、一瞬のうちに水も月も消えてしまひます。それを見た千代

「水汲み」だけでなく「下座行（下働き）」は、佛弟子ならば生涯忘れない事でした。

汲み取る物は何も無い「無所得」、「無所得悟」。それが「眼の見づち」と云う無心無我的姿。「空手還郷」つまり手の中は空っぽの本来の自己に還りました。

**〔莫妄想(五)〕千代能の桶**

の一つに「身心脱落の話」があります。この中に「破木杓」という言葉が出てきます。こわれた木のしゃもじ、役に立たない無用なものの事で、これが転じて脱落の意となります。そして橋本老師は「千代能

法事で耳にした禅宗のお坊さんの法話から「いくら美しい容姿を持つしていても、老衰の日は必ず来る。死後に白骨しか残らない、その無常の人生を生きる方法は佛道修行しかない」の言葉で現実の僥倖<sup>はがね</sup>に気付き、どうすればこの不安から逃れる事が出来るかと、出家の志を持つようになります。そして安達一族は、対立していた三浦

このままでは悟りを得る事など不可能だ」と云われます。とつぐに自分を捨てたはずの千代能ですが、未だ佛道修行者としての身心の落ちつきを得られない内に道隆禪師は亡くなられ、同じく中国か

『千代能がいただく桶の底抜けて水たまらねば 月もやどらじ』  
その後の千代能事、無著如大尼和尚は、無学祖元禪師の高弟となり、晩年は京都尼五山の首格であ

# 銀杏

発行所  
〒792-0835  
新居浜市山根町8番1号  
曹洞宗瑞應寺専門僧堂  
編集発行 瑞應寺  
電話(0897)41-6563  
FAX(0897)40-3127  
<https://uzioji.jp>  
毎月1日発行  
(振替 01330-2-31918)  
瑞應寺  
印刷所 東田印刷株式会社

や貴族、幕府の実力者北条実時も  
その一人であつたのですが、どん  
な男性も相手にしませんでした。  
実は千代野は夢の中に神様が現  
れ、ドラマや小説の主人公に憧れ  
るよう夢の中の相手を現実に求

に禅師は出家を承諾され「無著(無外の説もあります)」「如大(じょだい)」といふ僧名を与えられ、中世・近世を通じて女性の高僧としての伝承が伝わっていますが、その生涯は不明な点や、他の人との混在も多いのも事実です。

能は忽然大悟、言葉に成らない三十年の水汲みがあつてこそその目覚めでした。「籠が外れる」という言葉は、一般では自制心が利かなくなる等の悪い意味ですが、ここでは底が抜けて抱え込んでいた懼みや不安が抜け落ちる、疑問が解

（續く）



呼ばれ、すでに才覚を発揮されて  
いたようです。

そして大徳寺と妙心寺両大本山の住職を歴任され、そのご生涯は様々な逸話に彩られていますが、次に紹介する話は「徳の宗頓」と讃えられる禪師を物語る、代表的な機縁として語り継がれています。

●現代語訳●

雲水たちは、衣を脱いで一目散に琵琶湖に入り、水浴しましたが、禅師は片手で水を掬い、顔を洗うだけでした。④雲水が(申)訴なく思いつつ)「和尚様どうぞ裸になつて(私たちのように)水浴くださいませ」と誘つたのですが、⑤禅師はこやかに笑いながら琵琶湖の水の徳を残し、永く法孫(未来の弟子たち)に伝わるようにして、「と語り、微笑んで水浴を遠慮されました。

⑥さて、宗頓禅師一門の禅僧たちが、今も盛んに仏法を伝え続けてるのは、禅師の徳行が門下に



〔過去・現在・未来を分けない視点〕  
私尊が示す「小欲知足」は、『遺教経』  
の一節、「八大人覚」の最初にある  
教えです。また、道元禅師も本誌

(5) 一蓋の潤滑汚済せきせいと  
し、師し、輒然てんぜんとして対えて曰く  
「我わに見孫じゆそに付して  
永く是の潤滑の流りゅうう」と  
蓋けいし祇しま今、後昆蕃衍こうくわんえんして  
奕葉いせきや芊せんたるは斯そのれ其の  
遺余いふ波なみの草くさぶ攸ゆう明あけし  
『虎穴錄』行状十五十七

④	叢林	嘗て人口に繪灸して曰う
③	師	二三の法侶と偕に撥草瞻風
②	偶	琶湖の瀧を過ぐ
①	時に三伏に屬う	かくしもく
	溽暑	かくしもく
	人を喝す	かくす
	皆衣服を脱ぐ	みなふくぬけ
	同侶	みやまき
	しにひ	せきしや
	師	ひとり隻手もて水を掬い
	惟だ洗面するのみ	せんめん
	不但告げて曰く	いわ
	なん	かるかんかん

綿々と伝わっているからなので  
しょう。

【まとめ SDGs を古典に見出す】  
董奉は杏林を築いて人々に医療  
と食糧を分け与えました。宗頼禅師  
は水の徳を未来の法孫に残すと  
誓いました。これこそ時間と空間を  
超え、古今をつらぬく、理想的な  
SDGs の実践と言えましょう。

とも言われます。「永く続く法孫を尊重して自制する」宗頓禅師の実践は、「過去・現在・未来を分別しない智慧」という視点で読み解けば、「無分別の慈悲の行」と捉えられましょう。そして未来を過去や現在から切り離さないことが、SDGsにつながるのです。

はSDGsの理念にとてもよく合致していますが、宗頓禪師のように、明確に「将来の法孫のために水を大切にする」と示した逸話の例は、筆者は寡聞にして他に存じません。

2月号で紹介した「杓底一残水」（永平寺正門）、「水はこれ身命なり」とくる「典座教訓」、「学道の如き」（すべからく貧なるべし）【正法眼藏】、「随聞記」などのように、執着を放ち、水や食材に感謝して節約しています。

附  
品

- 『神仙伝』[原文]

①君異居山間為人治病不取錢物  
②使人重病愈者使栽杏五株輕者一株  
③如此數年計得十萬余株

鬱然成林（中略）

○「虎穴錄」〔原文〕

①叢林嘗膾炙人口曰

師偕二三法侶 摳草瞻風

②偶過琶湖瀨

時屬三伏 潤暑渴人

③同侶皆脫服而沐湖

師獨隻手掬水惟洗面爾

④同侶告曰

「盍裸露浣滌」

⑤師驟然對曰、

「我留與兒孫永流是潤德矣」

⑥蓋陶今後昆蕃衍奕葉芊綿  
斯其遺陰餘波之攸覃明矣

〔語解〕「人口に膾炙する」人のクチに美味の生肉（膾）と焼肉（炙）が入る、  
転じて人々が日々に良い評判を伝えること「撥草瞻風」行脚修行の

○『神仙伝』しんせんでん 葛洪 福井康順訳註  
明徳出版 1983年 P214～220.

※本書には董奉とうほう を含め 実在した人物の記録も含まれますがかなり誇張して表現されています。なお版本によつて表現が微妙に異なる部分があります。

○『医の名言』いのみごん 董奉とうほう 荒井保男  
2006年中央公論新社 P71～122.

○『虎穴錄』こくのくろ 訳註 芳澤勝弘編著  
思文閣出版 平成21年P71～720.

# 禪のたより

テレホン法話(0八九七一四一〇〇三三)

## 思い(衆生心)

【六祖因みに風刹幡を颶ぐ】二僧有り対論す。一は云く、「幡動く」、一は云く、「風動く」と。往復して曾て未だ理に契わらず。祖云く、「是れ風の動くにあらず、是れ幡の動くにあらず、仁者の心動ず」と。二僧悚然たり】(第29則..「非風非幡」)

この則は、六祖慧能禪師が五祖の法を受けてから、大庾嶺で慧明を教化したのち、南方に還ってきて十五年、機が熟するのを待つて、ようやく六祖として外の世界に出てこられる場面です。当時、法性寺というお寺では印宗法師の『涅槃經』講義が開かれ、たくさんの修行僧たちが集まり、慧能も身分を隠し勉強会に参加します。

ちょうど境内に風が吹き、お寺の旗が風を受けてパタパタと音をたてていきました。その時、二人の僧が風にはためく旗を見ながら論争を始めます。一人は、「旗が動く」(旗が動かないなら風が吹いていることも分からないはず)と。もう一人は、「風が動く」(常識的に考えて)と言ひながら往復問答していますが、慧能から見るとまつたく理にかなわず、つい口をはさみます。

「風が動くのではない、旗が動くのです」と。それを聞いて、二人の僧は心中はつとしました。

「佛教では心の動きを『刹那滅刹那生』、または禅語としては『活潑發地』と表現します。それは心が氣力に満ち溢れ勢い

盛んに活動する様子を表した言葉です。哲学(現象学)でも「志向性」という概念があります。我らの意識は常に特定の対象に向けられている性質や気持ちがあると説明します。さらに、志向性がなければ、客觀世界は現存しないという認識が現代思想の主流になっています。

唯識思想はこういう心の動きをより細かく分析し、心の動きの因果関係まで追究します。心の動きには志向性と共に認識の結果(執着心)が伴います。志向性とは感覚器官が外部の対象に注意を向けて(「作意」触れる事)(「触」)です。また「作意・触」という志向性と同時に心の内部では、感受作用(「受」)や表作用(「想」)を経て認識の意図・結果(「思」)を起すという心の原理を五つの遍く動く心(「遍行心所」)として説明します。

は「貴方たちの心が動いている」と答えではないかと想定できます。

『無門閑』を編纂した慧開はさらに「心が動くことでもない」といいます。それは「風が動く・旗が動く」という論

争を乗り越えた「心が動く」という命題が、新たな認識の「思(衆生心)」として

更なる執着を起こす恐れを警戒している言葉ではないでしょうか。二人の論争に対する慧能の答えは、二人においては自分たちの主張(「思」)が崩れる体験だったと思います。

無始以来、「無明」による間違った判断の認識は衆生心(「思」)として残つております、その思いが今を生きる我らの意識を支配しているかも知れません。慧能の「風が動くことでもなく、旗が動くことでもなく、貴方たちの心が動いている」という言葉を深く吟味する機縁がありますように。

## 九月の日鑑

一日 祝祷  
九日 参玄会(十一日迄)  
十四日 日曜参禪会  
十五日 祝祷・略布薩  
十八日 觀音講(仏教勉強会)  
廿一日 日曜参禪会  
廿二日 開山忌正當  
廿三日 寶篋印塔供養  
廿八日 開山忌夜  
廿九日 両祖忌速夜  
卅日 略布薩

瑞應寺専門僧堂 知殿補 金 範松  
令和七年九月一日~十日  
宮城県王教区青年会団參

## 十月の予定

一日 祝祷  
五日 日曜参禪会  
十二日 住友供養  
十五日 祝祷・略布薩  
十八日 觀音講(仏教勉強会)



■開山忌  
開山翁長傳大和尚より五世再中興  
月庭要傳大和尚の報恩供養。十七日よ

り市内を報恩托鉢。廿一日(日)、連夜特別に正當供飴經が厳修された。両日ともに、檀信徒先亡回向を修行し、総代様、梅花講員様はじめひかり幼稚園園児、檀信徒多数参拝された。

## 寶篋印塔供養

九月廿三日(火)、瑞應寺西墓地の永代供養塔「寶篋印塔」の供養法要が厳修された。

# 聖護寺秋大祭

《日時》十月十九日 午前九時~

御寺院様、一般の方も  
お参り下さい



十九日 日曜参禪会  
廿六日 日曜参禪会  
廿一日 略布薩

厳しい残暑が続き、九月になつても猛暑日が続くという毎年更新される異常気象です。しかし夜坐の最中、例年変わらず街より聞こえてくるのは「ドンドンドン...」という十月のお祭りに向けての太鼓練習の音。一方山内では更点・曉鐘・日中鐘と山内での梵音が通年鳴り響くこと誠に有難し。溪声便是広長舌 山色豈非清淨身観るもの聴くもの全てが仏さま、只々聞き流していくは仏心慈悲の心も育まれません。変わらぬようで変わっていく諸行無常の中につれて、日々の行持を勤める事の尊さが身に沁みます。

峯の色 溪の響きも みなながら  
我积迦牟尼の 声と姿と  
何はともあれ秋を迎え 虫の音が聞こえてくることに一安心。今年も大銀杏により黄金無上の仏国土に包まれて、雲水兄弟と共に一層坐禅辨道に励んでおります。

(道)